

始



特249

325

616

露支時局講演會速記錄

東亞調查會



特249  
616

# 東亞調查會規程

第一條 本社内に東亞調查會を置く

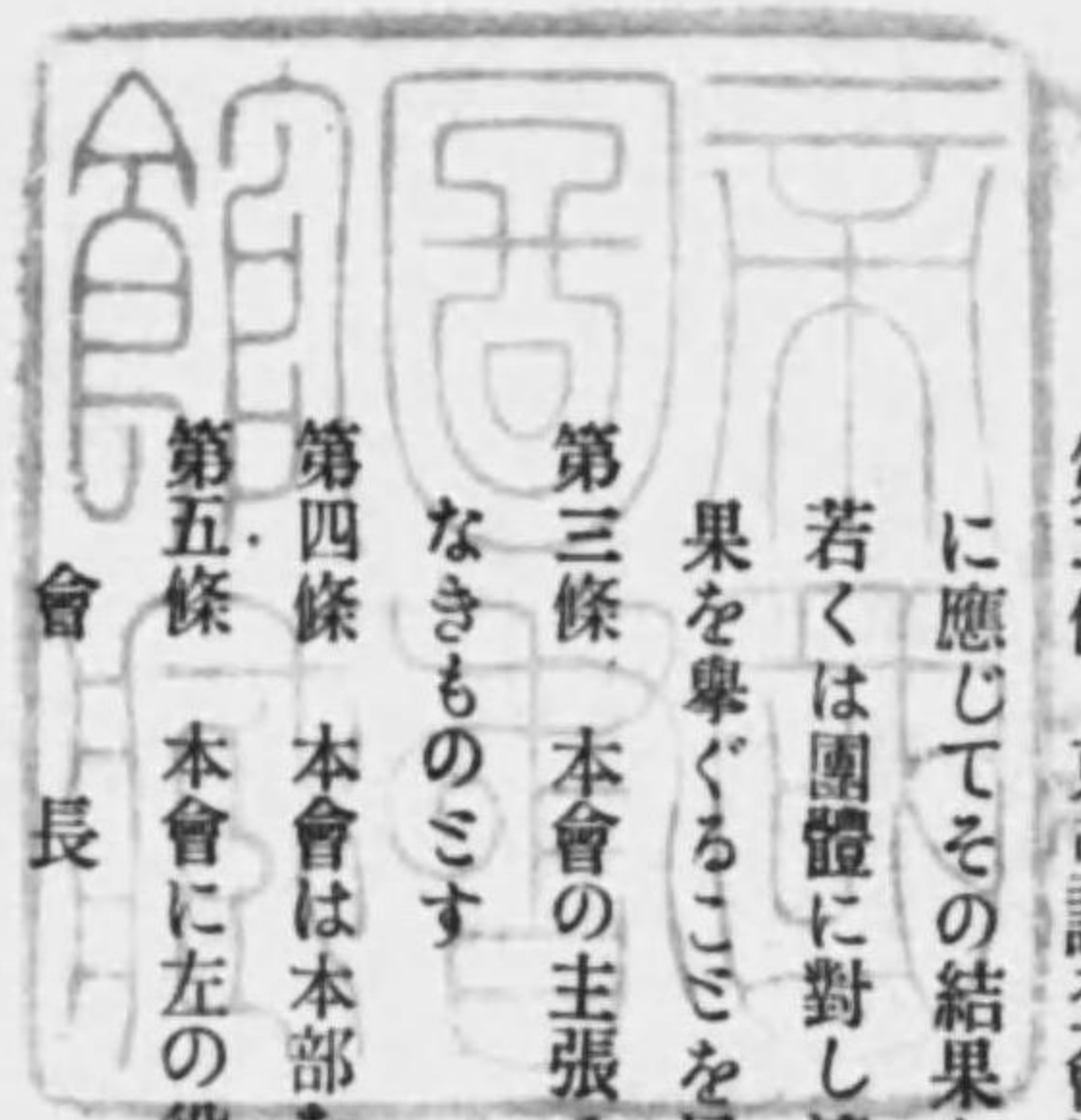
第二條 東亞調查會は東亞細亞諸國に於ける日本と利害緊密なる各般の問題を調査研究し、必要に應じてその結果を公表し、東亞に關する智識の普及を圖る外或は本會と趣旨を同じくする個人若くは團體に對し適切なる協調援助を與へ、或は當局に建議し、或は輿論を喚起し、以てその効果を擧ぐることを目的とす

第三條 本會の主張と行動とは、大阪毎日新聞、東京日日新聞、英文大阪毎日及東京日日に關係なきものとす

第四條 本會は本部を大阪に置く

第五條 本會に左の役員を置く

- |      |    |   |
|------|----|---|
| 會長   | 一  | 名 |
| 理事長  | 一  | 名 |
| 專任理事 | 二  | 名 |
| 理事   | 若干 | 名 |





主事 二名  
顧問 十名以内  
評議員 廿五名以内

第六條 會長は會務を總理し、理事長は會長を輔佐し必要の際は會長の事務を代行す  
會長は本社長、理事長は本社重役之に當る

第七條 専任理事は會長の指揮を受け會務處理の實行に當る  
専任理事は會長之を指名す  
主事は専任理事を輔佐す

第八條 理事會は理事を以て組織、本會各般の事項を審議す

第九條 理事は大阪毎日新聞社及び東京日日新聞社の左記職務に在るもの及び會長より特に指名せられたるものとす

東亞通信部長及び副部長  
外國通信部長及び副部長  
經濟部長及び副部長  
事業部長及び助役

外國課長、事業課長

上海、大連各支局長

南京、北京、奉天、ハルビン、漢口、香港、モスコイ各通信部主任

第十條 顧問及び評議員は會長より推薦し、將來缺員ある場合には評議員會の決議を以て補充す

第十一條 顧問及び評議員は本會の重要事項につきて會長の商議に參與し必要に應じて集議す

第十二條 特殊の事項を審議裁定するため顧問會議を開くことあるべし其規程は別に之を定む

第十三條 本會の經費は大阪毎日新聞社より支出す

### 東亞調查會 顧問會議規程

第一條 東亞調查會顧問會議は同會顧問並に會長及び理事長を以て組織す

第二條 顧問會議に總裁、副總裁各一名を置く  
總裁及び副總裁は顧問の互選を以て之を定む

第三條 顧問會議は會長の請求又は總裁の發意に依り之を開く

第四條 顧問會議は特殊の事項を審議裁定し且機密に亘る事項を議定す

第五條 顧問會議に於ては總裁議長となり議事を掌る、總裁故障ある時は副總裁之を代行す



第六條 顧問會議の議事並に決議は之を記録し其認定に従ひ之を公表することあるべし  
 第七條 顧問會議の記録の作成保管並に庶務は專任理事之を掌る

### 東亞調查會顧問及役員

#### 顧問

伯 爵	清 浦	奎 吾
子 爵	齋 藤	實 實
伯 爵	內 田	康 哉
陸軍大將	宇 垣	一 成
男 爵	林 權	助 成
公 爵	近 衛	文 磨
侯 爵	細 川	護 立
貴族院議員	德 富	猪 一
貴族院議員	井 上	準 之
	大 谷	光 瑞

#### 役員

<b>會長</b>	大阪毎日新聞社長	本 山	彦 一
<b>理事長</b>	大阪毎日新聞編輯主幹	城 戸	元 亮
<b>專任理事</b>	東京日日新聞編輯總務	岡 崎	鴻 吉
	大阪毎日新聞編輯顧問	檜 崎	觀 一
<b>理事</b>	大阪毎日新聞社顧問	新 渡	戸 稻 造
	大阪毎日新聞社顧問	竹 越	與 三 郎

同	編輯主幹	太 田	原 在 文
同	客 員	小 村	俊 三 郎
同	東亞通信部長	布 施	勝 治
同	外國通信部長	河 野	三 通 士
同	中央聯絡部長兼 東亞聯絡部長	平 川	清 風
同	經濟部長	下 田	將 美
同	東京日日新聞經濟部長	杉 山	幹 美
同	大阪毎日新聞事業部長	西 村	真 琴
同	庶務部長	山 田	潤 二
同	秘書課長	名 村	寅 雄
同	東亞通信部副部長	村 田	孜 郎
同	外國通信部副部長	黑 田	乙 吉
同	經濟部副部長	福 田	吉 藏
同	東京日日新聞經濟部 副部長	佐 藤	善 郎
同	大阪毎日新聞事業部 助役	田 附	音 次 郎
		世 川	憲 次 郎

#### 評議員(イロハ順)

東京日日新聞外國課長	高 田	元 三 郎
同 事業課長	羽 野	秀 介
大阪毎日新聞局長	澤 村	幸 夫
上海支局長	石 村	誠 一 夫
同 大連支局長	長 岡	克 曉
同 北平通信部主任	吉 岡	文 六
同 奉天通信部主任	三 池	亥 佐 夫
同 ハルビン通信部主任	小 林	英 生 夫
同 漢口通信部主任	足 利	利 英 生
同 香港通信部主任	德 富	雪 緝 夫
同 モスコ通信部主任	馬 場	秀 夫
文學博士	榎 木	幹 雄
貴族院議員、陸軍中將	阪 西	利 八 郎
大阪毎日新聞社副社長	岡 西	利 八 郎
法學博士	岡 實	實



同	編輯總務	奧村信太郎
法學博士	川上俊彦	
大阪毎日新聞社	高柳松一郎	
專務取締役	高木利太郎	
主筆	高石眞五郎	
衆議員	堤清六	
海軍中將	中里重次	
文學博士	内藤虎太郎	
衆議員	武藤山治	
貴族院議員	村田省藏	
大阪毎日新聞囑託	内田嘉吉	
文學博士	上田恭輔	
東京日日新聞編輯主任	矢野仁一	
貴族院議員男爵	松内則信	
貴族院議員男爵	藤村義朗	
貴族院議員男爵	船越光之丞	
	兒玉一造	

主事	阿部房次郎
大阪毎日新聞編輯主幹	喜多又藏
東亞同文會理事長	城戸元亮
東京日日新聞編輯顧問	白岩龍平
大阪毎日新聞社客員	稻原勝治
	丸山幹治

## 露支時局講演會速記録

### 東亞調查會

東亞調查會の目的とする所は種々あるが、東亞に關する智識の普及を圖るもその一端である。偶々露支國交斷絶の時に際し、去る二十三日午後七時より大阪市中央公會堂において大阪毎日新聞社および本會主催の露支時局講演會を開き多數の聽衆に感銘を與へた。今その速記録を見るに、各方面の權威者たる講師諸氏が蘊蓄を傾けられたる大論策であつて、獨り之を筐底に收むるに忍びない。すなはち上梓して大方諸賢に頒つこゝにした。もし世務を識り時勢を審にするの一助たるを得ば本懐であります。

昭和四年七月三十日

東亞調查會々長 本山彦一



## 開會の辭

東亞調査會專任理事  
大阪毎日新聞編輯顧問 榎崎 觀 一

本夕は大阪毎日新聞社ならびに東亞調査會の主催で、この時局講演會を開きましたところ、熱心なる諸君の御來聽を得ましたことは主催者ごいたしましてまことに光榮の至りに存する次第であります。さて皆様の御承知のごとく本月十七日事を發しました、この露支間の問題、赤化運動防止にまつわりまして支那政府が東支鐵道の不法急激なる回收を企てたことによつて露支兩國間に捲き起されましたところの風雲は如何になるであらうか、この時局に關心する人々はここごごごに手に汗を握つて注視したところであります。不法なる露國人の追放、東支鐵道の回收に奮然として立つたソウエート政府は直に最後通牒を支那に叩きつける、支那政府がこれに對して回答を發するや、また迅雷疾風のごとく國交斷絶の通牒を支那に叩きつけたのであります。しかして兩國の軍隊は東はボグラニーチナヤ、西は滿洲里に集中いたしましたまさに砲火の間に相見えんとする危機一髪の状態に達してをつたのであります。この東洋の何れにせよ何事か起つた場合、その結果は直にわが國に

甚大なる影響を與へるのであります。殊に最も利害の密接なる支那と、さうして一方ロシアとの間に一度戦ひでも起つたならば、その影響は直にわが國は勿論東洋のみならず世界に向つて一大波瀾を起さずんばやまないやうなわけになります。ところが何分にもわれ／＼はこの時局の將來に非常なる興味をもち且つその推移を考へて居つたのであります。が、啊嗚外交をもつて、——宣傳ミ策略ミかけてはその腕にかけて最も有名な支那ミロシアとの外交でありますから、時局は一時非常に緊張したのであります。今日はや、平靜の状態になつた。すなはち今日の夕刊で御覽になつたやうに列國の調停によつて開戦は先づこゝで避けられるかも知れない、さうして今後は外交問題に移つて行くかも知れないやうな状態になつてをるのであります。しかしながら、アメリカのいふごとき、支那は盗んだ品物を返せ、東支鐵道を舊態のまゝ、ロシアに返せといふがごときは到底底面を重んずる支那として事實行ひ得るごときではないと思ひます。支那にも支那だけの理窟があつて今度のこごを起したのでありますから、たごへ世間の、世界の同情はなくごも、直に今までの非を悟つて東支鐵道をその儘ロシアに返すごいふがごときは一寸出來得ない藝當だらうと思ひます。従つてこれが外交問題に移るごいたしまして、今後の迂餘曲折ごいふものは非常に興味があり、且つわれ／＼の利害に關するごころ、随分重大なる注意を怠るごが出來ない近頃の大問題であるご考へるのであります。御承知のごとくこの東支鐵道ミ滿洲鐵道ごはもご／＼同じ鐵道であり



ます。ロシアの帝政時代に北京政府を脅かし、そして滿洲を占領し、拵へたところの鐵道がいよいよ東清鐵道であります。滿洲里からボグラニーチナヤに至る東支本線とハルビンから大連に至る南行線が所謂東清鐵道であります。この鐵道は日露戦争の結果二つにわかれて北滿洲における今日の東支鐵道はロシアの所有に歸し、南滿洲における滿鐵は日本の所有に歸したのであります。しかもこもここれは同じ權利のこもに出來た一つの鐵道を二つにわけたものでありますから、この東支鐵道の現状、又將來さういふ風になつてゆくか、支那の利權回收運動として、この東支鐵道をロシアから奪回するさういふ運動の結果はさうなるか、これはこもここくわが滿洲鐵道問題に影響し、わが南滿洲における權益に影響するものでありますから、われわれは幸ひ今日露支間の開戦の憂ひは免がれたさういへども、今後この露支間の外交問題がさういふ風に發展し、さういふ風に推移するか、この形勢には重大なる利害をもちこれを監視し注意する必要があるのであります。わが社ならびに東亞調査會はこの重大なる時局に鑑みまして、こもここの時局講演會を開き滿洲問題について最も造詣あり、權威ある京都帝大教授文學博士矢野仁一氏、住友總本店の顧問でありも中華民國の軍事顧問でありましたところの寺西秀武氏、本社の東亞通信部長である布施勝治氏の御講演を願つて皆様さもこの問題の經過、將來の推移について研究をいたしたいと思ふのであります。

最後に一言申上げて置きたいと思ひますのは、私さも東亞調査會のこもでございます。東亞調

査會はすでに先月廿六日に成立いたしましたして、その概要を大阪毎日新聞で發表いたしてあります。諸君は大体これを御承知になつて下さつてをるこも、思ひますが、更に申し上げれば、本會は東アジアの諸國、日本と利害關係の最も密接なる國々の各般の問題を調査研究するものであります。そしてこの調査研究したこもは必要に応じてこれを公衆の前に發表する——一概にアジア問題と申しまするけれども、アジア問題の深い知識さういふものは未だ世に普及してをらないやうに考へまするので、この東亞の知識を世の中に普及したいさういふこもが一つの目的であります。また私さもこの會と同じやうな趣旨の個人若くは團體に對して相當な援助協調を與へてその事業を達成ささうさういふ考へがあります。なほ我國の利害の關する重大なる問題について或は調査研究の結果を政府に建議し、またはこれを輿論に訴へて、わが國策の建設に對して貢獻するこもあらんさ欲するものであります。しかして本會は會長本山彦一氏、理事長城戸元亮氏のほか顧問さういまして清浦伯爵、齋藤男爵、内田伯爵、宇垣大將、林男爵、近衛公爵、細川侯爵、徳富猪一郎氏、井上準之助氏、大谷光瑞氏斯様な方々を顧問に推薦いたしましたして、重大問題がありましたさきにこの顧問會議を開きましてわが國の東亞に處するこもこの態度を明かにし、その大本を立て、國家のために國民のために貢獻しようさういふ遠大な考へをもつてをるものであります。なほ評議員さういましては朝野知名の士を推薦いたしましてこの會の目的達成のために御盡力願ふこもになつてをります。斯様の組



織でありますので、今回はじめての試みとして、この講演會を開くのでありますが、今後におきましても出来る限り斯様な會合を開きたいと思つてをります。さうか皆様も本會が國家的國民的の一つの大なる機關であるといふ事に御注目下され、われ々の目的を達成するやう御後援を願ひたくこの場合特に御披露かたがたお願ひして置きます。さてたゞいまより滿洲におけるロシア支那といふ演題のもに京都大學教授文學博士矢野仁一氏の御講演を願ひます。

矢野博士はも支那がまだ大清帝國に申してをりました時代、服部博士、巖谷博士、岡田博士その他の諸先生と一緒に支那に招聘されて支那の大學に教鞭をこられ、支那の學生を養成された方でありまして、今日支那が革命をなしたその多くの人材の中には、矢野氏の薰陶を受けた人々が非常に多いのであります。その後御歸朝になりました京都大學に教鞭をこられてをるのであります。特に支那ロシアの國境、支那の邊境問題について深い御研究がありまして、この方面において日本における權威を稱せられる方でありまして、博士に御講演を願ひましたところよろこんでおるで下さつたのであります。生憎一昨日から少し首の筋をいたためられましたために實は首をまけることの出来ないやうな御容態であります。眞正面を向いただけでさちらにも首をお向けになることが出来ないやうな御病氣であるのであります。博士は一度毎日新聞の紙上で講演をやるといふことを天下に社告して置きながら、今日自分の病氣の爲にこれをやめては信を天下に失ふ所以である、

病をつめて演壇にたつこいつてわざわざ京都からおるで下さつたのであります。私はたゞいまお目にかゝりましたが、その御病氣の態を拜見しまして甚だいたいたしく思ふ位であります。しかし博士のこの御心に對してわれわれは頭を垂れて御無理は存じますが一席の御講話を願ひたいのであります。さうぞ左様な次第でありますから御靜肅に御聽取あらんことを希望いたします。

## 滿洲に於けるロシアと支那

東亞調査會評議員

京都帝大教授  
文學博士 矢野仁一

唯今司會の方から御紹介下さつたことではありますが、二三日以來急に首すじを腫らして、それが非常にいたむのであります。それで、實は大体かういふ話をしようといふことは考へてゐましたけれどもなほ話の順序方法を推敲したいと思つてゐたのであります。それができなくなつたのであります。それで推敲なしに皆様にお目にかゝることになつたのであります。それに首が痛むので十分に考へてお話することはできないから、話は必ず統一を缺き脈絡を缺くこと、なりお聞き苦しからうと思ふ。しかし病氣のために御断りするよりは、諸君に辜負することはいわゆる



ます。まけて御勸辨を頂きたい。

私の演題は『滿洲におけるロシアと支那』の問題を主として、ロシアと支那との歴史的關係によつて、今日ロシアと支那との關係がどうなつてをるかといふ話をしようと思ふ。つまり、過去の話であります。こゝへ参りまして他の方々の演題を拜見いたしますと、布施さんは現代の『ソヴェート政府の東方政策』に關するお話でつまりロシアが東方に對しては現在どういふ政策をこつてゐるかといふお話であらうと思ふ。それから寺西さんは『露支時局の將來と我對策』といふのであるからつまり將來についてのお話である。それで今日の講演會は期せずして偶然に露支關係の過去、現在、未來の話といふことになつたわけであります。さて、ロシアと支那の關係といふものは滿洲において實に重大な任務をもつてゐるのであります。滿洲が今日あるが如き滿洲になつたのは、このロシアとの關係あるがためである。若しロシアの關係がなかつたら、滿洲は今日のやうな滿洲になつてゐなかつたことは明かである。滿洲が今日のやうにならなければ、支那もまた今日のやうにならなかつたことは申すまでもないことで、滿洲におけるロシアと支那との關係といふものは、滿洲の歴史にあり、また支那の歴史にあり、これほど重大なことはないのであります。そのうちでも東支鐵道は、過去におけるロシアと支那との關係の凝結沈澱したものといつてもいいのであります。支那が今日この東支鐵道を支那一方の意志によつて奪回するといふやうなことは、滿洲の歴史から支

那とロシアとの關係をなくしてしまふやうなもので、さういふことは果して可能であるかどうか。滿洲の近代の歴史は實に最後の頁までも、ロシアの血が滲んでゐるといつてもいいのであります。そのロシアの關係を滿洲から除いてしまはうといふことは、あたかも滿洲の近代の歴史を抹殺してしまふやうなもので、一体さういふことが支那の主張をほり、出来るものであるか、どうか。私はそれを考へて見たいと思ふのであります。滿洲におけるロシアと支那との關係は、大約四つの階段に分けることが出来る。第一の階段は、西曆千六百八十九年、日本の元祿二年、清朝の康熙廿八年であります。この年ロシアと支那との間に締結されたこのネルチンスク條約、ネルチンスクは黑龍江の上流の一つの源流であります。この、シルカ河に臨んでをりまする外バイカル州のロシアの町であります。こゝで結んだこのネルチンスク條約を中心とした階段であります。支那と申しましても滿洲朝廷であります。この滿洲朝廷がその實力即ち武力によつてロシアの黑龍江におけるこのころの活動を阻止した條約であります。この黑龍江に進出したのはロシアが先か、支那の方がさきか申しますと、何秋濤の朔方備乘に論じてをります通り、支那の方が先であります。黑龍江をロシアではアムールと申しますが、はじめて黑龍江の名をき、ましたのは千六百卅六年であります。それから三年後に滿洲朝廷は既にその兵力を黑龍江に出してをるのであります。ロシア人として、黑龍江の名前を聞いたのは千六百卅六年であります。黒龍江に出張



てまゐりましたのは西暦千六百四十四年でありますから、よほごロシアの方がおくれてゐるのであります。しかし、滿洲朝廷が黒龍江に出たに申しましたも、それは黒龍江の南でありまして、黒龍江の北にはおよばなかつたのでありますから、ロシアは北に侵入して参つたところで、別に支那の領土を侵略したわけではありませぬが、その地方の土人は滿洲朝廷の援助を請ふてロシアに抵抗したところから、兩國の衝突になつたのであります。兩國の關係の歴史は随分長いのであります。戦争したことはさうたくさんにはない。この時を除いては義和團の時、それから今回位なものであります。この時の戦争の結果結ばれたものがネルチンスク條約であります。この條約によつて、支那はロシアをして黒龍江の全流域を包含する地方を支那の領土として認めしめたのであります。滿洲朝廷はロシアよりさきに兵を黒龍江に出したに申しましたも、今申した通りそれは黒龍江の南でありまして、北には全然及ばなかつたのであります。かへつてこの北の方はロシアの實際に征服占領した地方であります。また黒龍江の南でもその地方に住んでゐたソロンシカ、ダウルシカドウチエルシカいふ種族、射獵或は遊牧をもつて業をせる野蠻未開の種族をして滿洲朝廷の勢力を認めしめたにふただけで、實際に支配したわけではないのであります。實際に支配してゐない地方に對して滿洲朝廷の領土權を確立したわけでありまして、之は非常な成功であります。此時ロシアが後のロシア程強かつたならば、當然黒龍江を境界線と主張してもよかつたわけであります。滿洲朝

廷はこの條約でロシアにネルチンスク地方を讓つた様に云つてをりますが、それは決して滿洲朝廷の明白なる領土は云ひ難いからそれは只實際に領土でない地方に對する要求を放棄したにすぎないのであります。ロシアは御承知のごとく、まだ今日のやうに強くなつてをらない、黒龍江におけるロシアの活動も、ロシア政府の事業ではありません。ロシア人個人のいは、私の事業であります。このネルチンスク條約を中心とするところの露支關係の階段といふものは、ロシアにおいては、まだ極東政策といふものが確立しないまでであり、支那においては、すなはち滿洲朝廷としては國家全盛の時期に際會した時代であります。それであるからしてこのネルチンスク條約なるものは、ロシアにおいて不利、滿洲朝廷にこりましては利益のある條約が締結されたといふことは當然のことであります。ロシアとしては随分残念な條約であります。一時、黒龍江の北のアルバチン城を中心としてロシア人の耕作地は二千七百エーカーに達したに云ふことでもあります。實にこの北滿洲にはロシア人の血は滲んでゐるのであります。之を捨てなければならなくなつたのであります。さういふ條約でありますから支那から要求した條約が申しますに、そうではない、當時のロシアとしては、兎も角滿洲朝廷をしてロシアに對してそれだけの國境を認めしめるだけでも利益を以てロシアから進んでこの條約を結んでもらつたのである。露支關係の第一の階段は、滿洲朝廷が、その實力によつてロシアをして滿洲全部の領土權を承認せしめたものであります。第二の階段以後になり



まするに、ロシアがその極東政策に云ふものは定まつてだんだん滿洲領土を壓迫して來るのであります。前にロシアから得たところの領土も、滿洲朝廷自身の武力、自己の實力だけではそれが維持出來ない、他の力によつて維持しなければならぬといふ有様になつてゐるのであります。第二の階段は西曆千八百五十八年の愛琿條約から北京條約までの階段であります。この時分になりまするに、ロシアはさうしても黒龍江の北の北滿洲、つまり、アムールスカヤ、それからウスリー江の東の方の沿海洲はロシアは何んでもかでも取らねばならぬといふ態度で支那に臨んでゐるのであります。たゞへ支那が反對しようが武力を以つて之を排斥し是が非でもロシアのものにしなければならぬといふ考へで臨んでゐるのであります。この頃になりまするにロシアの北太平洋における領土、殊に勸察加、アラスカ、アリウシアン群島或は黒龍江の下流のロシアの植民地はだんだんに發達いたしてをるのであります。それでさうしてもロシアとしては、黒龍江の支配權をロシアに於て握らなければならぬ、黒龍江の航行を自由にしなければならぬといふことは非常に大切な問題になつて來たのであります。そして何んでもかでも、これは支那に割讓せしめなければならぬといふ準備を以つて臨んでをるのであります。當時ムラヴキョフ將軍は東部西比利亞總督にいたしまして、またイグナチエフ將軍は北京駐在ロシア公使にいたしまして、あらゆる手段を盡しまして、この黒龍江の北、アムールスカヤの領土、ウスリー江の東ブリモルスカヤの領土をロシアに割かし

める談判をしてをるのであります。若しロシアがこの帝政時代に結んだ條約といふものが帝國主義領土侵略主義的の條約であるといいたしますれば、この愛琿條約、北京條約は最も帝國主義的、領土侵略主義的の條約であります。故に若し帝政時代に結んだ條約は帝國主義的、領土侵略主義的の條約であるが故に廢棄すべしといふならば、これらの條約こそは一番さきに廢さなければならぬといふところの條約であります。愛琿條約は一八五八年にムラヴキョフが六日間の強談判の末滿洲朝廷の代表者でありますところの奕山將軍をして承諾せしめたところの條約であります。奕山將軍はこの條約が如何に滿洲政府にさつて不利益であるかといふことを知つてをつたのであります。知つてをつたにか、はらず、その真相をありのまま、に滿洲朝廷に報告するところが出來なかつたほご、それほご不利益な條約であります。それほご強談判によつて無理無体に承諾せしめた條約であります。それで奕山將軍は朝廷からおごめを恐れて報告しない、それ故に北京政府は愛琿條約といふものは、決して黒龍江の北のアムールスカヤをロシアに讓つた條約ではなく、一時ロシアに貸すことを承諾した條約であるを考へてゐるのであります。つまりロシアに租借を許した條約だを考へて居たところが、後になつて租借でなく割讓したのであるといふことがわかつたものであります。それから奕山將軍は非常なお叱りを蒙りまして北京朝廷は條約を批准しなかつたのであります。それで愛琿條約の批准問題は非常に重大な問題になつたのであります。ところが千八百六十年には英佛同盟軍



が北支那に遠征いたしまして、北京附近へ乗り込んで参るこゝになつたのであります。それでイグナチエフ將軍は英佛同盟軍と北京朝廷との間に調停の勞をこりまして、その報償として北京朝廷をしてやむを得ず愛琿條約の批准を承諾せしめたのであります。また、それと同時に愛琿條約によつて、ロシアと支那と兩國の共同管理といふこゝにいたしてをりましたところの沿海洲の地方をあげてロシアに譲らしたのであります。ロシアとしては、これによつて、曩のネルチンスク條約によつて失つた領土を回復したのみでなく、沿海洲の地方といふものを加へてこれを支那から獲得したのであります。それに随分ロシアは亂暴なこゝをやつてゐるのであります。その一例をあげるに愛琿條約によつて沿海洲はまだロシアの領土になつてをらないにか、はらず、ほこんざわが物顔に處理してゐる、千八百六十年になつてはじめて沿海洲はロシアの純粹の領土になりましたけれどもそれまでは露支兩國の共同支配でロシア單獨ではさうするこゝも出来なかつたわけでありましたが、ロシアはほこんざ自分の領土を考へて、沿海洲の沿岸における港灣を占領し、今の浦潮斯德を占領し、またウスリー江のてうご黒龍江に入るこゝの河口にあるこゝの滿洲朝廷の守備兵を對岸に追ひ拂つたといふやうなこゝを致して居ります。随分亂暴な話であります。それに愛琿條約によつて、松花江の航行權を獲得したといふこゝも随分思ひ切つた亂暴であります。松花江は純粹の支那の内河であります。その兩岸はこゝに支那の領土であります。その松花江の航行權といふものを口

シアが支那から取つたといふこゝは、これは近世の外交史におけるこゝの二大罪惡の一つであります。この時の支那人等は松花江は黒龍江の本流で黒龍江と合流した後の下流も松花江と考へてゐたのであります。松花江の航行權を許したといふこゝは、つまり黒龍江下流の航行權を許したつもりなのであります。ムラヴキョフは之を知りながら支那人をだまして松花江の航行權といふものをぎこつたのであります。これは随分ひどい亂暴な話であります。ですから若しソヴィエト社會主義共和國聯邦のロシアが、帝政時代に結んだ條約は帝國主義的領土侵略主義的の條約であるから無効であるといふならば、かういふ條約こそ第一に無効といはなければならぬ筈であります。松花江の航行權のこゝきはまつさきに放棄すべきものであるにもか、はらず、御承知のごまぐ放棄しない。黒龍江の北の方のアムールスカヤの領土、ウスリー江の東の沿海洲の領土も放棄しない。支那もこの條約の廢棄を以てロシアに要求しない。私が支那人であつたらかういふ條約の無効を主張したであらうと考へます。イグナチエフ、ムラヴキョフの結びました愛琿條約、北京條約はほこんざロシア全体の希望を代表したものであります。第一の階段の時までは、ロシア全体の希望がネルチンスク條約に現れてをるわけではありません。また愛琿條約の前にもいたるまでもロシアにおいて二つの意見がありまして、ムラヴキョフの領土侵略主義に反對するこゝの説がロシア朝廷において相當勢力があつたのであります。第二の階段になりますと、さういふ反對はなくなつて愛琿條約



北京條約といふものはロシア人全体の意見を代表してムラヴキョフ、イグナチエーフを支持してゐるのであります。第三の階段は、日清戦争後の三國干渉による報酬をいたしまして、いまの東支鐵道幹線、滿洲里からしてボグラニーチナヤに至るまでの鐵道敷設権を得たる以後日露戦争によつて滿洲をロシアの領土とするといふ考へを放棄して、單に東支鐵道に満足しなければならなくなつたまでの階段であります。東支鐵道は御承知の如く、滿洲里からしてボグラニーチナヤに至るメーソンの鐵道であります。東支鐵道は御承知の如く、滿洲里からしてボグラニーチナヤに至るメーソンの鐵道であります。千八百九十六年李鴻章をしてこの鐵道の敷設権を認めしめたときに、ロシアが支那の滿洲に道を借りてシベリア鐵道を浦潮斯德に延長するといふことは經費を節減する點において、またその他種々の便宜多き點においてロシアの利益なることは勿論であるが、支那の利益は一層重大で、第一に日本から蒙るべき危険を減ずることが出来る、支那はイギリス或は日本から何時如何なる難題を持かけられるかも知れない、何時日本から攻撃侵略されるかも知れない、そのときにロシアをして支那の味方たらしめることを得るのは、この鐵道あるためで、この鐵道なければロシアは支那の味方となることが出来ないといふやうなことを申してをります。李鴻章はまたこの條約

に關して、ロシアの都から北京朝廷に送つたところの電報に、若しロシアの要求を拒絶するならばロシアは非常に不満足を感じるであらう、ロシアをして非常な不満足を感じしむれば支那の蒙る不利益は恐るべきものがあらうといふ電報を北京朝廷に發してをります。この條約を結んだ事實上の當事者たるウキツテは、この條約は日本の侵略に對して支那を援助するのが目的だ、支那のためにかういふ條約を結んだのである、支那の援助によつてロシアの軍事上の地位を鞏固にするの目的でないといふことをいつてをりますけれども、この條約によつて、浦潮斯德を完全に連絡することが出来るやうになる、戦争の時にはロシアはこの鐵道でロシアの軍隊糧食を輸送するために自由に使用し得る、支那のすべての港灣を自由に使用し得るといふやうな條項がありました、決して、ウキツテの申しまするやうに支那を助けるためにこの條約を結んだのではないのであります。ロシアの地位、經濟的、軍事的の地位といふものを強くするために結んだところの條約たることは争ふことが出来ないと思ふのであります。それからロシアは進んで旅順大連を占領し千八百九十八年に至りて旅順港、大連灣の租借條約、東支鐵道の支線をハルビンから旅順大連に至るまで延長敷設するといふ條約を締結したのであります。これが果してロシアをして絶對に必要なことであつたかどうかといふことは、その當時においてロシアではいふ議論のあつたことでもあります。また今日においてそれがロシアをして非常に不幸な戦争であつたところの日露戦争の直接の原因となつた關



係上これはロシアにまつて不要な條約であつたを主張し、この條約の當事者たることを回避せんとする考へがあります。ロシアは西比利亞の領土を維持するために、西比利亞の領土の經濟的の價値を維持した増進するために、また歐羅巴ロシア乃至西比利亞と太平洋とを連絡する上において、この東支鐵道といふものは絶対に必要でありますけれども。滿洲を併合するといふこと、ハルビンから旅順港、大連に至る支線を敷設經營するといふやうなことは、果して絶対に必要でありませうか。それにもかゝらず、當時のロシアの形勢はロシアをして遂に滿洲の領土をロシアに併合するといふこと、滿洲のロシア化といふことに進ましめたのであります。そして御承知のごとく千九百年の義和團匪の亂の餘波が滿洲に及びましたのを口實いたしましたして事實上滿洲を占領したのであります。これに對して支那はもより抗議いたしましたけれども、日本が若しこの時に國力民命を賭してあの日露戦争といふものによつてロシアに反對しなかつたならば、支那の口ばかり、筆ばかりの抗議ではロシアの滿洲占領、滿洲のロシア化といふものの實現されることを防ぐことが出来なかつたであらうと思ふのであります。諸君は如何お思ひになるか知らんけれども、私は若しあの時に日本が日露戦争によつて實力を以て抗議をしなかつたならば、ロシアは遂にこの滿洲占領、滿洲合併といふやうな目的を達し、今頃はロシアの領土となつてしまつて居つたではないかと思ふのであります。支那がロシアの滿洲占領といふものを防止し得たのは自分の實力ではない、日本の武

力によるのであります。次に第四の階段であります、西曆千九百十七年ロシアの革命騒亂により帝政のロシア、ロマノフ王朝の帝政は崩壊いたし、今のソヴェエト社會主義共和國聯邦となりまして、支那に對し、帝政時代の帝國主義的、領土侵略主義的の政策を棄てるといふ宣言をいたしましたから千九百廿四年に有名な露支協定、露奉協定を締結し一方において支那の主權、支那の利益を侵害するところのすべての條約、協約、協定、約束といふやうなものを凡て無効とすることを宣言いたし、同時に一方において東支鐵道に關するところの暫定辦法、即ち將來兩國から正式に代表者を出して正式條約を締結するまで、東支鐵道の取扱方を定めまして、東支鐵道に對するところのロシアの積極的の利益を認めしめたまでの階段であります。千九百廿四年の露支協定といふものは随分不思議な協定であります、一方においては帝政時代において結んだところの、支那の主權を侵害し、支那の利益を侵害するところの一切の條約を廢棄するといひながら、その支那の主權、支那の利益を侵害するところ最も大なるところの東支鐵道の特權、東支鐵道の利益は計畫的にこれを維持してゐる、頗る矛盾した話であります。諸君は矛盾と思ひませんか。私は支那の主權、支那の利益を侵害するところのかういふ利益、かういふ約束、條約こそ廢棄すべきものであると思ふのであります。かういふ矛盾の條約協定といふものを結んだときまでの段階は第四の段階であります。この段階は、今後支那が東支鐵道を奪回し、この結果露支兩國の國交斷絶となつた事件までも含んでゐる



階段であります。千九百廿四年、ロシアの外交委員次席カラハンは支那に對して、ロシアが帝政時代に結んだ支那の利益、主權を侵害する一切の條約、協定を廢棄することを宣言しました。またユーリンは極東共和國の代表者といふ名義で、實はロシアの代表者として支那に對して實に思ひ切つたラヂカルな宣言をいたしました。すなはち、ロシアは支那に對して機會均等、權利平等の主義に立脚するところの新方針を宣言したのであります。過去三百年間、ロシアと支那の二國間に締結されたところの條約の数は五十餘りに達してゐる。しかしながら、これらの條約の多くは事實上ロシアの帝國主義的、領土侵略主義的政策のあみをこめてゐることを率直に承認し、ロシアは今やこれらの條約を未練なくすべて拋棄せんとしてゐる、そして露支兩國は新らしく機會均等、權利平等の主義によつて條約を締結せんとしてゐるといふことを宣言したのであります。このカラハンの宣言、ユーリンの宣言を讀めば誰でもロシアの舊帝政時代に獲得したる特殊利益中の最も大なる利益といはねばならぬところの、この東支鐵道の特權なきは眞つ先に拋棄しなければならぬはずと考へるのであります。また愛琿條約によつて、不當に支那人を欺き支那をして無理に認めしめたところの松花江の航行權なきは何を措いても最初に拋棄しなければならぬはずであります。ところが今お話したやうに千九百廿四年の露支協定、それから同年の露奉協定には、一方にはさういふ條約を廢棄するといひつゝ、しかも松花江の航行權を保留し、また東支鐵道といふものの特權は用心深

く計畫的に維持せんとしてをるのであります。精しいことは時間がないので申されませぬが、ロシアのやり方は名を捨て實をこるこいふ考へでありまして、随分この東支鐵道の名義上の主權は支那に譲つてをりますけれども、實質的權利は依然ロシアに保有されてゐるのであります。それは千九百廿年から千九百廿四年までの間に、ロシアは國內の政情にも非常な變化があります、即ち千九百二十一年に於てはロシアは新經濟政策を建てまして資本主義への最初の轉回を致してをります、また例の白系ロシア人が東支鐵道の沿線を根據地としてソヴィエト政府に反對するこいふこも、千九百廿四年に一切の條約を拋棄するこいひつゝ、拋棄しなかつた原因を説明するものではありますけれども、しかしロシア國內の政情の變化、また白系ロシア人が東支鐵道を根據地としてソヴィエト政府に反對するこいふやうな事實がなかつたとしても、私はロシアがこの東支鐵道を拋棄するこいふやうなこみにしなかつたであらうと思ふ。東支鐵道を拋棄するこいふこは、沿海洲を拋棄するこいふこを意味するのであるから、ロシアにして沿海洲を拋棄するこいふ覺悟がない限りこの東支鐵道を拋棄するこいふこは考へられない。東支鐵道には實にロシア人の血がしみこんでゐる、ロシア人の滿洲徑略の最後の血の凝結したものであると思ふのであります。またこの東支鐵道の沿線からして豊富なる穀物、家畜類をロシアに供給するこが出来るこいふやうなこもありませんから、到底ロシアは、千九百廿年から千九百廿四年までの間に國內の政情の變化がなかつたこいたしま



しても、この東支鐵道を拋棄するといふやうなことはなかつたであらうと思ふ。それ故、ロシアは列國が支那におけるその條約上の權利を維持せんことをこの企圖を、帝國主義的であるといつて非難して居るにか、はらず、自分自から帝政時代の帝國主義的の政策の遺物であるところの東支鐵道を維持せんがために、戰爭手段に訴へんとしてをるのであります。私はロシアが東支鐵道を維持し歐羅巴西比利亞の經濟力を背景に世界革命の理想を達せんとして居る間は日本としては南滿洲における地位を維持することは絶対に必要であると思ふ。或は、ロシアは、今後政策の變化により世界革命の理想を拋棄するやうなことがあるかも知れない、そしてその世界革命の足溜りとして沿海州或は黒龍江以北のアムールスカヤの領土を維持することをさまで必要としないやうな時代があるかも知れない、また之に反して、世界革命の理想を達するために却つて千九百廿年カラハン或はユーリンなきが宣言したやうに、この東支鐵道はロシアにとつて必要ではあるけれども、これを拋棄することはつまりその理想たる世界革命を實現する上において一層必要である、つまり支那から外國人の權利、利益を驅逐するためにも必要であるといふやうなことを考へる時代があるかも知れない。その結果支那は東支鐵道を回收するといふ目的を、自分の力ではなくとも、達する機會があるかも知れない。さうでなくとも露奉協定には、ロシアは千八百九十六年から六十年の後に東支鐵道といふものを無償で支那に還附するといふ條、即ち千九百五十五年になるまで無償で支那に還附し

なければならぬといふ條がありまして、あこあますところ廿數年であります。最初は八十年後といふことでしたが、二十年だけ早めることになつたのであります。さういふ場合になれば、日本はロシアに對して滿洲における現在の地位を維持する必要があるやうにも考へられるのであります。しかしロシアが東支鐵道を支那に還附し、さうして、支那がこの東支鐵道を回收した後、に果してさうなるか、支那は獨力でこれを維持することが出来ませうか。今日支那がロシアに對して、あの強がりをして東支鐵道を奪回するといふことができたのは、果して獨力でできたことではありませんか、日本が滿洲においてあの地位を維持してをることなくして支那はさうしてさういふ態度をこころが出来るか、さういふことを考へて見ましても支那が六十年の後に、すなはち千九百五十五年に東支鐵道をロシアから回收して獨力で維持することが出来るか考へられませうか。私は支那はそのときになつたならば必ず日本を牽制するためにアメリカなきを誘つて來はせぬかといふことを考へるのであります。アメリカは日本の滿洲におけるところの勢力の擴張を恐れてをります。アメリカはこれまでも南滿鐵道の中立、共管を提議し又之を併行する錦愛鐵道等の敷設計畫をなし四國幣制借款團、新四國借款團なきを組織しあらゆる手段でもつて日本の滿洲における利益を妨礙してをるのであります。さうして常にアメリカの豊富なる資本を滿洲に投下しやうとして機會を窺つてをるのであります。世界大戰の時でありますが、千九百十七年、ロシアの帝政の崩壊した



後に、東支鐵道の沿線が非常な混亂に陥り東支鐵道は聯合七ヶ國の共同管理となりました時に、アメリカは如何なる態度をこつたか。アメリカのステアンソンは技術部長として共同管理の實權を握り、アメリカ政府に對して東支鐵道より日本の勢力を驅逐するために必要な方策を建議したことは有名な話であります。アメリカは單獨管理の野心を暴露してをるのであります。これはつまりアメリカといふものは如何に滿洲において日本に反對して權力を擴張せんとしてをるかを示すものであります。それ故に、ロシアが滿洲から手を退いた後に支那が日本を牽制するためにアメリカの勢力を滿洲に導いて來ないといふ保證はさうして得られませう。若しアメリカが支那と結合して滿洲にその豊富なる資本と優秀なる技術をもつて日本と競争することになつたら、日本にこつてはロシア以上の危険でないか考へるのであります。それ故に私はロシアが今後東支鐵道に對して如何なる態度をこるにいたしましたしても、日本としては儼然として南滿にもつてゐるころの、正當な利益正當な權利は維持しなければならぬものと考へるのであります。日本は正當な權利利益を維持するために非常に大膽でなくてはならない。その代り不正な權利利益を主張することは斷じて不可である。正しき權利を主張することにおいて大膽であると同時に、不正なことに對しては飽くまでもこれを避けるといふことが非常に必要なことであると思ふのであります。

## ソウエート政府の東方政策

東亞調査會理事

大阪毎日新聞社  
東亞通信部長

布 施 勝 治

私は本年春ソウエート聯邦に遊び、つひ歸つたばかりである。今回の訪露に際して、私の最も興味深く感じたことは、今日のロシアは愈々スターリンの天下になつたことである。今から六年前、勞農巨頭レーニンが死んだ時、レーニンの後繼者たる者は誰であらうと云ふ問題がおこつた。當時レーニンの後繼者として呼聲の最も高かつたのはトロツキーであつた。然しトロツキーにこつて恐るべき競争者が現はれた。それはスターリンである。スターリンの名は革命の當初餘り聞えてゐなかつた。然し彼はロシア共産黨の元勳の一人で、最初から黨内において隠然勢力をなしてゐたのである。彼はスターリン即ち「スチールの人」「鋼鐵の人」を自ら稱してゐるやうに「強い人」「力の人」意志の人である。レーニン死後の二、三年間はスターリンとトロツキーの競争時代であつたが、結局勝利はスターリンの手に歸し、トロツキーは最初土耳其機斯坦に流され、さらに本年國外に逐はれた。私はこの五月一日土耳其に遊んだ機會においてマルモラ海島プリンキボに、今は亡命客のトロ



ツキーを訪ねた。

トロツキーなきロシアは云ふまでもなくスターリンの天下である。而して私はソウエート政治の最高権力がスターリンの手に握られた云ふ事實について特に興味を感じる一つの理由を有する。それは何であるか。

私は大正十四年ロシアに遊んだ時モスコでスターリンを訪ねた。私がスターリンの事務室に案内されて彼の前に立つた時スターリンはその机からはなれて、先づ私に握手の手をのべ乍ら、私もアジア人であるこの言葉を以て私を迎へてくれた。スターリンは高加索のジョルヂア出身で我々と同じく目が黒く髪の毛が黒い、またその顔色も黄味を帯びてゐる。スターリンはアジア人である。而してロシアはアジア人たるスターリンの天下となつた。これ實にロシアがスターリンの天下となつた云ふ事實について私が特に深い興味をもつた所以である。ツァー時代のロシアはスラヴ人が政權を握つてゐた。故にロシアは歐洲列強の一つに數へられてゐた。今日のロシアはその政權がアジア人の手にある。今日のロシアは「アジアの國」云つてよいと思ふ。

私は今回の旅行に際してロシアの政情を研究したが、その結果を簡潔に云へば、今日のロシアは政治的に安定し、経済的に不安の状態にある云はねばならぬ。ロシアは政治上スターリンの権力下に統一されてゐるがしかし経済上においては行詰りの状態にある。國力は著しく衰退した。従つ

てその對外政策は平和方針をこつてゐる。しかしその結果支那の如き弱國にすら輕侮され、在支露人は蹴られたり、踏まれたり、あらゆる壓迫と虐待を受け、つひに我慢強いロシアも勸忍袋の緒を切つて今回の如き對支強硬策に出で、最後通牒、國交斷絶に、つゞいて國境一帯に亘り思ひ切つた軍事的示威運動を執行するこゝとなつた。今や露支國境上戰雲漲り、今にも火蓋が切られんとしてゐる。然し今日までのところ、露軍が大舉して支那領内に侵入した云ふ報道はない。ロシアは滿を持してゐる。然し矢を放たない。それは何故であるか。私はソウエート政府の從來より來つた東方政策の見地から露支果して本式の戰爭をやるや否やの觀測を下し度いと思ふ。

今から丁度九年前私はモスコのクレムリン宮城でボリシエウイキーの御大將レーニンと會見した。その時私はレーニンに向つて「西洋と東洋とどちらが共産主義成功の可能性が多いか」の質問を投じた。これに對してレーニンは

眞正の共産主義は東洋では成功の見込がない。西洋にだけしか實現し得ない。しかし西洋の列強は東洋において自ら己を埋める穴を掘つてゐる。

この答へを與へた。その後五年を経て私は再びモスコを訪ねた時スターリンとの會見において私はまづスターリンに向つて「近年支那、印度、ペルシア、埃及、其他東洋諸國において頻發する解放革命の運動はレーニンの云へる如く西洋の列強が東洋で掘つた穴の中に己を埋める時期が近づい



た前兆ではなからつか」この質問を出したところスターリンは

「然り、たしかに余もさう思ふ。植民地は帝國主義の背面である、背面の根據地の革命化はたゞに帝國主義をして、その後方の守りを失はしめるのみでなく西洋革命の危機に對して、決定的シヨツクを與へるもので、われ等はこれによつて帝國主義を覆さねば止まないものである。背面に正面の両方から攻めたてられた帝國主義は結局滅亡の外なからう」この答を與へた。

何故レーニンは共產主義は西洋にしか成功し得ないと言つたか。又スターリンは何故西洋を世界革命の上から見て帝國主義の正面になし、東洋をその背面に置いたか。共產主義の實現はマルクスシズムの説く如く産業の極度の發達を必要條件としてをる現代においては産業の極度に發達してをるのは主として歐米の資本主義國である。東洋には日本を除く以外各國みな文明の發達遅れ、産業は極めて幼稚の状態にある。これ即ちレーニンが東洋では共產主義の實現は不可能である、共產主義は西洋にしか成功し得ないと言つた所以であると同時に、スターリンがボリシエウイキーの目ざす正面の敵は歐洲の列強にありと言つた所以である、然らばボリシエウイキーとしてはたゞ一筋に歐洲を目標とし歐洲列強、歐洲の資本主義國帝國主義國に向つて突進すべきであつて東洋に向つては何等手出しをすべきでないのである。共產主義の實現不可能なる東洋に對しては用事がないわけである。しかるにソウエート政府はその建設以來十一年間終始東洋に向つて非常の努力を傾倒し却

つて共產主義實現の見込ある西洋に向つてはむしろ近年甚だ消極的の態度を執つてゐる。それは何故であるか。それは即ちレーニンの言葉を借りて言へば「東洋は西洋を埋める穴であるからである」又スターリンの語を借りて言へば「東洋は世界革命戦局の背面である」からである。しからは「西洋を埋める穴」は何であるか。又東洋は何故に世界革命戦局の「背面」であるか。

ボリシエウイキーの目標はいふまでもなく産業の極度に發達し、従つて共產主義實現の可能なる歐米の資本主義國であらねばならぬ。しかし乍ら歐米の列強はその財力、武力共に強大であつてこれを正面より攻撃することは非常に困難である。元來正面攻撃は如何なる戦争においても困難にして多くの犠牲を要するものである、されば古來の名將は敵の抵抗力の強い正面攻撃を避けて抵抗力の弱い側面もしくは背面に迂回作戦をこつたのである。レーニンの革命家として最も偉かつた點は彼が天性の革命戦略家であつた點にある。而して彼の革命戦略の奥義は敵の抵抗力の強いところを避けて、弱いところを衝くにある。レーニンは歐洲大戰直後西歐列強が戦争のために疲弊し且つ動搖の状態にあつた當時しばしば正面攻撃を試みた、例へばホンガリー及びドイツの共產革命、ポーランド攻撃戦争の如きレーニン等が最も大膽に西歐の列強に向つて正面攻撃を試みた實例である、しかし此等の正面攻撃は失敗に終り且つ歐洲の列強が漸次安定してその革命に對する抵抗力が増大するやレーニンは正面攻撃を避けて背面迂回の作戦をこり東洋方面に向つて力を注ぐ方針をこつた。



ボリシエウイキエーはソウエート政權を樹立した當時一方被壓迫階級を煽動して支配階級に抵抗せしむるの政策と同時に弱少民族、被壓迫國を助けてその民族解放運動、國際水平運動を煽動し、以て帝國主義國にあたらしめる方針をこつた。而して今日の世界における被壓迫國は多く東洋にあつて、これを壓迫する帝國主義國の主なるものは西歐にある。従つてソウエート・ロシアの東洋政策は東洋弱小民族、被壓迫國を扶けて歐米の帝國主義國に當らしめるにあるのである。レーニンは會つて「英國の革命へ行く道はインドを通つて行かねばならぬ」を語り、また世界革命の前衛たるべき歐米先進國のプロレタリアに對照して、東洋の被壓迫民族を稱して「世界革命の豫備隊」を名づけた。これ即ちインドの革命によつて英國の革命をひきおこさんとするのである。また東洋の被壓迫國を味方に引き入れ歐洲帝國主義國に對する背面攻撃における豫備隊をなさんとするのである。東洋各國は日本を除く外、文明の發達遅れ極めて幼稚な産業状態にある、従つてレーニンのいへる如く所謂「本當の共產主義はさうてい實現の見込みがない」のである。しかし東洋には歐洲列強の殖民地がある被壓迫國がある。彼等を援助して歐洲の列強に當らせることは間接に歐洲の列強を弱めることになる、即ち歐洲列強に對する背面攻撃となる。歐洲大戰當時から歐洲列強の東洋方面における勢力は著しく低下しこの方面における歐洲列強の抵抗力が頗る弱くなつた。こゝにおいてレーニン等は東洋方面に向つてその「赤き手」を伸ばし、まづトルコ、ベルシヤ、アフガニスタンに向つて

その獨立運動帝國主義反對運動を煽動し、以つて歐洲列強殊に英國に反抗せしめた。當時ソウエート・ロシアの近東方面における運動が如何に有力な者であつたかは英國當局の狼狽ぶりによつても想像するこゝが出来る。當時英國の當局者は「インド危ふし」を叫んで警鐘をならしたものである。しかし如何に歐洲大戰で弱つたといへさすがは大英帝國だけあつて一度び危險のインドに及ぶや敢然としてソウエート政府の所謂近東赤化の計畫に對抗し強烈なる反撃を加へた。即ち當時の英國外務大臣カーゾン卿はモスコ政府に向つて近東方面の宣傳停止ミテヘラン及びカブール駐在のソウエート大使召還要求のため最後通牒をつきつけ、強烈なる抵抗を試みた。レーニン等の所謂英國革命への道程たるインド革命の計畫は失敗に終り、ソウエート政府は近東及び中東方面における宣傳の手を緩めざるを得なかつた。しかしボリシエウイキエーもさるもの一度び近東及び中東方面における英國の頑強なる抵抗に會つてこの方面から一時退却を餘儀なくされたが決してそれだけではひるまない、彼等はさらに遠く迂回運動を起し極東に向つてその手を伸べるに至つた。即ち數年前來ロシアが支那に向つて手を伸べ國民革命の後押しをやつたのは支那革命そのものが目的であつたといふよりはこれによつて支那における列強の勢力を弱め、あわよくばインド革命を誘起し以てその目ざす主要敵國たる列強殊に英國において革命を引起さんとしたものであると見なければならぬのである。さればこそ、三年前ボロヂン等の指導下に國民革命が長江一帯を風靡した時この革命は



對外的においては主として排英方向に向ひ又英國が最もこの革命を重大視しわざ／＼其本國から數萬の陸兵を上海に派遣した。英國がかゝる非常手段に出たのはボロヂン等の目的が那邊にあるかを知つてゐたからである。即ちボロヂン等は支那において英國を埋める穴を掘るものであると見たからである。支那最近の革命は廣東より長江中流まではボロヂン等の筋書通りに展開したが長江の下流即ち英國陸軍の上陸集中せる上海に來つて頓挫し、ボロヂン等の計畫は結局見苦しい失敗に終り今や却つて數年前武器や資金で援助し革命の戰略を教へ込んだ蒋介石等を敵に廻して國交斷絶の事態を見るに至つた。

露支關係は刻々悪化し何時なんごき火蓋が切られるかわからぬ状態にあるが、しかも今日までのところロシア軍が本式に戦端を開いたと云ふ報道がない、モスコイ來電によれば交通委員長ルズタークは米國新聞記者に向つて、赤色軍は決して支那領内に入らないと聲明したと云ふことである。滿洲里やボグラニーチナヤからの報道による赤色軍の方が遙かに優勢である。勝味は確かにロシア側にあると云ふ。併し赤色軍は滿を持し乍ら矢を放たない。それは何故であるか。第一、ロシアの敵は西にあつて東にない。第二、ロシアとして支那に對して開戦する事はその立國の根本方針に反する。即ち被壓迫國の一つたる支那に對して開戦することはその東方政策の根本たる被壓迫民族援助方針にそむき、平素敵視してゐる帝國主義國の仲間入りすることになるからである。

たゞし露支國境の風雲はモスコイ及び南京兩政府（南京政府が戦争を欲せぬことは云ふまでもない）の方針通りに行かず、突發的に戦端が開かれるやうなことがなからうか、そこにはかなり大きな戦争突發の危険が存在してゐると思はれる。露支國境には少くも二つの危険分子がある。即ち第一、支那軍隊の手先ならんとしてゐる白露軍と、第二、ロシア赤色軍内におけるトロツキー派の士官連である。白露軍とトロツキー派はこの機に乗じて露支の間に戦争をひきおこし、以て現ソウエート政府顛覆の機會をつくり、白露軍としては帝政復活、トロツキー派としてはスターリン派に代るにトロツキーを以てせんとするであらう。即ち露支境上或は兩國政府の本意に反する突發的出來事がこれ等の危険分子によつてひきおこされる恐れがないとは云へないのである。

私はこゝで結論に移り度いと思ふ。ソウエート東方政策の根本は東洋の弱小民族、被壓迫國を扶けて排外運動、獨立運動、國際水平運動を煽動し歐洲列強に當らせるにある。レーニンの言をかりて云へば、東洋において「西洋を埋める穴」を掘るにある。スターリンの言を以て云へば東洋から「背面攻撃」を加へ、西洋に對する正面攻撃を容易ならしむるにある。これがためにロシアは東洋の弱小民族、被壓迫國を援助し、指導し、これをその味方に引き入れ、「世界革命の豫備隊」に入れなければならぬ。然るに今回ロシアの支那に對してミつた強硬政策は從來の方針に反して支那を壓迫しこれを敵に廻はしたものである。然し私は今日においてもソウエート政府の東方政策の根本方針



は變らぬものと思ふ。

たゞ支那はあまりにロシアを見くびつた、バカにした。これでは東洋弱小民族の指導どころの話でなくなる、さうしてもこの際威力を示す必要がある。こゝにおいて思ひ切つて強硬政策をこつたのである。然し強硬政策の目的はたゞ威力を示し、支那國民をしてロシアは強い國である、たのみ甲斐ある國であると思はせるにあつて、支那を徹底的に膺懲し、これを全然敵に廻はしてしまふのではない。

従つて露支國境に於ける赤色軍の行動は示威運動に止まる。深く支那領土内には侵入するに至らぬであらう。私はこの春モスコイであるソウエート要路の人に「東支鐵道に對する支那側の壓迫に對してソウエート政府は如何なる對策をこる考へか」を質問したところ、その要路者は

左の頬を打たれたから直ちに右の頬を打ちかへすは帝國主義國のすることであらう。その結果ロシアは支那において歐洲を

こぼしはしない  
こ答へた。然るにロシアは今度左の頬を打たれたのに對して、憤慨し、已にこぶしを振りあげてしまつた。しかしそれは恐らく單に支那を威壓するためであつて、なぐるためのものではなからう。もしロシアにしてふりあげたこぶしをふり下ろして支那の頬を打つたとするならば、それは即ちロシア自ら帝國主義國の仲間入りをしたことになるであらう。その結果ロシアは支那において歐洲を

埋める穴でなく、自ら己を埋める穴を掘ること、なるであらう。

しかし恐らくソウエート政府はその從來の東方政策の根本方針によつて、軍事行動はこれを示威運動に止め、兵を深く支那領土に入れるやうなことは萬あるまいと思ふ。

## 露支時局の將來とわが對策

住友總本店顧問  
元中華民國軍事顧問

寺 西 秀 武

けふは大變暑いやうであります、私はそれ以上の暑い話をせねばならぬことになりましたして定めし御迷惑でありませうが豫めお詫びをして置きます。

露支時局の將來が果して戰爭を開始するや。露の外交副委員長たるカラハンの最後の決心は如何であるかは面白い研究問題であります、本日の夕刊に依りますと、米國の國務卿スチムソンは既にフランス及び我國と協同して露支兩國に對し和平解決の警告をしてゐること、判かりました。米國が果して干涉するならば、露國は武力に訴ふる必要がなくなりますので今こなつては私の講演の主眼たる「戰爭になるや、否や」云ふことは御断しをする必要が減じましたから、今晚は唯カラハン



の「最後の腹は如何である」云々云々だけを御断し、たいご思ひます。それに先ちまして兩國の政情について簡単に申し上げます。ロシアの方は今布施さんが精しくお話になりましたから、私は先づ支那の方を申し上げますが、支那は政治上まさに統一の途につかんとしつゝ、あります。しかしながら新軍閥たる張學良、閻錫山、馮玉祥——此人は職を退きました、その部下その他四川雲南等に小軍閥が割據してゐまして、其將來がどうなるか云々云々は大きな疑問であります。それから財政ですが南京政府は毎月の歳入が僅かに四百萬元餘であつて、毎月の歳出が千萬元近いものを要するのであつて、これを補ふためにしばしば公債或は國庫證券を發行してゐるのであります。支那の内國債を發行した總額は五億萬元を超えてゐます。そのうちで國民政府が發行したのは二億を超えてをります。今年になりまして發行したものは去る三月關稅増徴を擔保にして裁兵公債五千萬元と去る五月煙草稅を擔保にして國庫證券二千五百萬元とを發行してをるのであります。その金は軍隊解散と平和建設とに使ふはずであつたのですか、廣西派の内亂が起りましたから裁兵公債の五千萬圓の大部分はそれに使用され、またその後馮玉祥問題が起つて、その方にも多額を費消され、その後今回の東支鐵道の問題が起つてこれにはより以上多額の經費を要するといふ窮境に陥つてゐるのであります。かくのごとき危い状態にあるにか、はらず、何が故にロシアに對しすこぶる強硬なる態度をもち暴力に訴へてまでも東支鐵道を回收したか、實に不可解でありませんか、然しこれは南京

政府の罪ではない、如何にならば三民主義なるものが不平等條約の撤廢をこなへ、外國が帝國主義によつて得たるところの利權の回收を高唱してをりますから、この三民主義をほんご宗教のごとく信する國民黨ならば現在の國民政府は對外政策上どうしてもすこぶる強硬なる態度をとり、時には暴力に訴へるごいふごをしなければ蔣介石即ち政府の信望が地に墜ることになるのでありますからやむを得ないのであります。ロシアの方はどうであるかごいふご、これまた共產主義によりまして資本家を打倒してをるのでありますから、戰爭に最も必要なる内債の募集ごいふごは絶對に不可能であります。しかし工場殆ど全部を國營にして居るのであるから、各工場の製品を戰時において比較的容易に利用しうるごいふ便利はあります。さればごて工場に金をやらないでその製品だけを唯で利用することは出来ないはずである、その上に今年は大いに飢饉であるごいふごでありますから假令小なる戰爭にしても如何なる方法を以て戰費をつくるかごいふごがわれ／＼の大いに研究したい問題であります。次は兩國の陸軍力の比較でありますが、支那軍隊はその兵數は非常に多い、また近年來の内亂で實戰に慣れてはゐりますが、其大部分は訓練が缺けてゐて、殊に傭兵制度でありますから士卒の責任觀念が乏しい。昨今では少しく新式兵器を購入しまして飛行機やタンク等がありますが、其數も少しいし其質も劣つてゐます、而して最も大なる缺點は動員が出来ないのであります。動員ごいふごは御承知の通り平時編成から戰時編成に移るごであります。



平時一萬餘の戦闘員をもつてゐる一師團が、戦時になれば倍数以上の二萬何千人の兵力になるのみならず、そのほかになほ三個師團なり四個師團の新しき師團をつくり得るのであります。それが支那の軍隊は平時の師團が一萬人、戦時においても變化がない、やはり一萬人をもつて戦はねばならぬのみならず、そのうちから留守部隊を残し、兵站の守備にも若干の部隊を派遣せねばなりません。故に他の國の軍隊は戦時には大に兵数が殖えますが、支那の軍隊は反對に減るものを見なければなりません。そのほかに、ミシゴロによれば兵数を少くして給料をごまかすといふやうな弊害もなきにしもあらずです。それで新聞に載せられた北滿洲方面において支那の兵力が或は張作相のひいて出るのが六萬で、萬福麟のひいて出るのが四萬合計十萬であり、ロシアはバイカル以東に四個師團の兵力すなはち約五萬の兵力をもつてゐるに云ひますが、この兵数は唯平時人員を示すのみで戦時になれば支那は若干減少し、ロシアは大に増加するのであります。ロシアの赤衛軍の實力に就きましてはまだ判明しませんが、先年ポーランドに對してロシアが攻勢をこつた時はたつきは實に目醒しくありました。その後よほぎの訓練を積んでゐるし、在郷兵士數も著しく増加してをりますから、軍隊そのものが非常に精練されてゐるのみならず、戦時には大兵を擧げ得るのであります。又彼等は歐羅巴大戰に臨んでゐますから新らしき兵器をもつてをります。而してタンク毒瓦斯飛行機等に至つては支那はほんざ比較にならぬほぎ優秀であります。

これから本題に入りまして「カラハンの最後の腹」に就いて御断し、まじやう。支那は近來の外交の成功から自惚れて益々鼻息が荒くなり、外交政策がさぶる強硬になつてゐますから、普通の手段では到底談判が出来ない、和平解決が出来ない、そこでロシアの方はやむを得ず國交断絶を通牒し國境に向つて軍の集中をはじめたのである。而して軍の集中だけで支那を威嚇し得て此紛糾を解決し得るさういふ判断をしたのか、或は開戦さういふ大決心をしてゐるのか、大なる疑問であります。而して私はカラハンの最後の決心は戦争にあらず、出兵であるさういふ判断をしたのであります。戦争にあらざる出兵さういふのはさういふことを意味するかさういふこと、北滿洲の地域をロシア側から考へてみたならば、不戦條約中の國家の自衛權即ちロシアの自衛權の範圍内にあるに云ふても良いでせう。北滿洲に就きましては矢野博士の御断の通り、ロシアは過去においてあまたの歴史を有し現在においても東支鐵道さういふ世界の大交通線、東亞における唯一の不凍港たる浦潮にいたる通路等の關係があつてロシアの國家の安全に對して緊切なる關係を有してゐるのでありますから、ロシアが此地域に對して自衛權を及ぼすに云ふことは無理ではないかと思ひます。不戦條約の自衛權に就きまして、簡單に申上げますが、昨年六月のアメリカよりの通牒には自衛權の範圍を自國の領土さきめてゐたのである。ミシゴロが十二月になつて米國の上院は米國としては不戦條約の國家の自衛權の字句には條件にも拘泥されずして米國のモンロー主義そのものが、即ち米國々家の自衛である



こいふことを上院の外交委員が決議して初めてこの不戦條約を承認したのである。モンロー主義そのものは御承知の通り南北アメリカを通じての主義であり、南北アメリカに對して他の國の干渉侵入を許さないこいふのであるから、北米合衆國の信する其自衛權の範圍は南アメリカ諸國にまで及んでゐるこいふべきである。英國が不戦條約に對する回答には、世界のある地方にその地方の繁榮と安全とこいふものが英國々家の平和と安全に緊切なる關係を有してゐる場所がある、その場所に對して他の國が攻撃するこいふ場合においては英國は當然この自衛權をその地方におよぼすべきであるこいふ様な留保をしてゐるのである。而して其地域を明示してゐませんがエジプトのごき即ちこれでありませう。我邦はこれに對して別に留保をしてゐませんが私の考へでは南滿洲の如きは此内に加ふべきかと思ふのであります。不戦條約の自衛權の範圍に此の如き事情が存してゐますから、ロシア側として其自衛權を北滿洲に及ぼすこいふことは無理ではないと思ひます。此の如き地域に於て支那が暴力を以てロシアの條約上の權利を強奪し、且つ其居留民の一部を獄に投じたミヤれば、ロシアがこれに對して武力を以てする權益擁護をするのは寧ろ當然の措置ではありませぬか。私をして假りにロシア側になつて理窟をいはせるならば、日本は何が故に山東に出兵したか、山東鐵道は日本はすでに支那に還してしまつて合辦ではない、日本の山東に對する歴史はロシアの北滿洲に對する歴史と較べて見ても、ロシアの方がすこぶる緊切な關係をもつてゐるのである。

日本が山東に出兵し得るならば、是を世界の輿論が認めるならば、ロシアは當然北滿洲に出兵し得るのであると強辯し得るのである。而して其實行方法としてロシアはまづ支那政府に對してロシアは北滿洲の權益を擁護するために出兵する、しかし戰爭は好まない。而して兩國軍隊が接近するこいふ衝突する恐れがあるから支那軍隊はなるべく避けて貰ひたひこいふ様な通牒を發して、其後相當大きな兵力を二方若くは三方面から同時に哈爾濱の方向に向けて進めたならば、其結果が如何なりませう、諸所に於ける支那軍隊の抵抗によつて戰鬪行爲の實顯と云ふことは多少は免れないと思ひますが、若し支那側が大戰爭と云ふ大決心がないものとするれば「戰爭にあらざる戰鬪行爲の實顯」だけで終るではないかと思はれる。これを各國人が戰爭と名づくるか、出兵と云ふかは各解釋がありませう。而してロシア側としては、最後迄出兵と云ふて居れば戰の地域も東支鐵道沿線に止まり、他の各國は中立條規を守る必要もなく、平時の通り自由に貿易も出来るのであるから、名實共に出兵と云ふ譯けであります。ロシアの國交斷絶の通牒にも宣戰布告はしてゐない、而して其末項に東支鐵道に關する條約上の權利を保留するこいふことを云ふてゐます。此保留は即ち場合に依つては之を擁護すこいふことをほのめかし、且つ將來出兵する場合に於ける口實を用意してあるとも云ひ得るのではないか。假りにロシアが出兵するものとして、其行動が若し果敢迅速に行はるならば、東支鐵道沿線の占領は一ヶ月以内に出來るでせう。之に對して支那政府が之を國際聯盟に訴ふるは全然



無意味である。其理事國が互に協議してゐる間に、ロシアは東支鐵道の占領を終り得る。加之ならず國際聯盟には、第一は、ロシアが加入してゐないから断られたらそれきりである。第二は、米國が加入してゐない。世界の外交を支配しつゝある米國をぬきにして此難問題を解決するの困難なることは申す迄もない。又米國が主動者となつて、不戰條約を以てロシアの出兵に干渉する場合に於ても、出兵は戰爭でない、假令其結果が戰鬪行爲の實顯となるにしても、大なる戰爭にはならないのであるから、不戰條約だけを理由としては、大なる意味をなさないものである。私は以上申し述べました諸般の事情に基いてカラハンの最後の腹は出兵であらうと判断するのであります。然かしながら、米國國務卿が主動者となつて、列國と協同して干渉するに云ふことが本日の夕刊で稍明白になり、殊に盗んだ權利を還せよ云ふ様なことを該國務卿自ら之を唱へるに云ふ形勢になりつゝありますから、カラハンに腹があつても遂に實現しないかも知れません。而して「戰爭に非る戰鬪行爲の實顯」に云ふことは、吾人は將來の爲め大に研究すべきか否信じます。次は我國の對策であります。新聞や雜誌の上に現はれて來るのを見るに、日本と滿洲との關係はすこぶる重大であり緊切である。かるが故に、北滿洲に對しても時によれば出兵しなければならぬに云ふものがありますが、勿論——我邦は北滿洲に對しても或は吉林省の森林借款であるとか、鐵道の權利といふやうな利權關係が、若干ありますが大したものではない。それに對して不戰條約に所謂日本國家の自

衛をおよぼす、それに對して現地保護をするといふやうなことは穩當でない、これは列國の同情を失ひ世界の輿論に反する行動といはざるを得ない。又或る人が云ふには、滿洲に對して我邦は特に緊切なる關係にあるから、滿洲における諸問題に對しては日本獨力を以てこれに干渉し、これが解決にあたらねばならぬ、もしこれに他の國の協同が加はるといふやうなことになるれば、他の國と滿洲との間に若干の關係が結ばれて、これが複雑になつて我國のために不利益である、我國はあくまで獨力をもつてこれが解決にあたるといふやうな議論もありますが、私としては此の如き頭はよほさうと思ふ。私は南滿洲でも當然列國に開放し列國民にもこの開發にあたるべきであるとい信するのであります。それにもかゝらず、他の國の人間は一人も寄せないといふやうな意味にこれをこられるといふことになるに、その外交はよほさういふ所謂侵略……領土侵略といふか、今日流行らない意味になつてしまふのであります。而して今回の問題は北滿洲に限られ東支鐵道が兩國の争ひの焦點となつてゐるのである。東支鐵道の歴史は諸君も柳承知の通りすでに大正七年に列國共同で國際監督をした事もあつて大正十一年になつてこれをロシアと支那に返したのであります。故に今日我邦が若し列國の容喙を許さず、獨力にて之に干渉する様な態度を取つたならば、大に列國の同情を失ふことは、云ふまでもないのである。故に私は最後の干渉の必要が起つた場合には我邦は宜しく列國と協同して之に當るべきか否信じます。兩國の時局に對して、各國政府は或は戰端を開



きはせぬか疑ふた爲めに之を過大視した嫌ひがありますが、兩國の争は單に東支鐵道の權利云ふ一問題だけではありません。此の如き小なる問題に就いて列國の調停を煩はすのは餘りに大袈裟である。ロシアにしても、新進の支那にしても、國家の体面上當然自國の力を以て解決すべきである。これを國際聯盟、不戰條約に訴へるさいふのは、實に愚劣の極に屬らざるを得ない。又列國にしても、此の如き微々たる國際問題に干渉すべき筈がないのである。今日の夕刊によりまして米國の國務卿及幣原外相は共に成る可く兩國自身で解決されたい云はれてゐる様であるが、私は大に賛同するのであります。而して我邦は南滿洲に種々の利權を持つてゐますから、各國人就中支那人に疑はれ易い云ふ弱點があるのであります。故に露支兩國の争ひに對して深入りしない方が却つて我邦の利益でもあり解決に對する方便でもあると信じます。殊に今日に於ける露支兩國の主張に大なる懸隔がありますから、之に對して公正なる裁斷を下すことは容易でない。即ち「盗んだものを還せ」云ふ様なことは世界外交の大權威者たる米國の發言し得るもので、我國として發言しない方がよいと信するのであります。邦人中には、支那と我邦とは關係が緊切であるから、我對支諸政策は自主的であらねばならぬ云ふ人が多いのですが、私としては此説に賛同することは出来ません。昨今に於ける世界の外交の趨勢は大體に於て協調に傾いて居り、而して米國が其覇權を握つてゐると云ふてもよいでせう。故に我邦の外交でも、此大勢に逆行すれば失敗するのであつて、

過去に於ても我自主的外交には失敗の例が多々あるのでありますから、私は時に依つては追隨外交の有利なるを主張するのであります。兎に角自主とか、追隨とかの體面は如何でもよいから、其結果が我邦の實益になればよいかと信じます。幸ひにして幣原外相は能く米佛等と協同してゐられる様でありますから、私は安心してゐるのであります。又此解決には相當永き時日を要する殊に之を兩國に委ね、他國が干渉しなかつたならば解決の見込が立たないから、我邦は速かに何等かの方策を講じてこれが解決に當り、以て東亞の禍根を除かねばならぬ云ふ人がありますが、私は此説にも賛同し得ないのであります。如何とせよ支那もロシアも外交に種々の駆け引きがある國でありますから、其解決は當然永びく筈である。縱令これが半年一年と永びいたとて、地域は北滿に限られ、其他の各地方では何の故障もなく自由に貿易し得るので、これが却つて我國の利益であるとも云ひ得る。私は唯國際道德上及露支兩國民衆の幸福上速かに此争を止めさせたい、我邦としても相當の方法を講じたいと思ふのであるが、條約破棄とか、赤化運動とかを能事とする國民に對しては、却つて紛糾が永びいて自省の暇を與ふる方が彼等民衆の將來の幸福であること固く信するのである。故に我邦として極めて冷靜に最後まで列國が動き来るまで傍觀の態度を續けねばならぬと信するのであります。

終りに臨みまして一言お断りしておきますが、今日私がかくの如き演題を設けたのは、この演題



25  
172

に對して全部の解決をしようといふのではなくして、この問題に對しあまたの研究すべき問題を諸君に提供して御研究を願ふが爲であります。即ち今お話しした内の諸問題が主眼であり演題は案山子であつたのであります諸君は邦家の將來のため、なほ深く研究されることを希望しておきます。

昭和四年八月三日印刷  
昭和四年八月八日發行

非賣品

大阪市北區堂島上二丁目三十六番地大阪毎日新聞社内  
東亞調查會

代表 檜 崎 觀 一

發行者 荒 木 利 一 郎  
大阪市北區堂島上二丁目三十六番地

印刷人 荻 野 伊 太 郎  
大阪市西區阿波座中道二丁目三十八番地ノ一

發行所 大阪市北區堂島上二丁目三十六番地  
大阪毎日新聞社



終

